

ワイズスクランブル

# 薬 漬 け



## 高齢者を「薬漬け」から救おう、 国が初めて 副作用の有害性明記のガイダンス

### 薬の適正使用の指針案

- 多種の薬の服用で健康を害することがある
- 単に薬剤の数を減らすのではなく、処方内容の見直しに重点
- どの薬から減らすか、変更するかなど選抜順位の考えを記載
- 医師や薬剤師などが一元的に情報を集約し連携



もう30年以上前のこと、病院の待合室でのご老人たちの会話。

「あれ、幸子さん来ていないねえ、どうしたのかしら心配だわ。身体の具合でも

悪いのかしら、ねえ。」

高齢者ともなるとお友達が極端に少なくなる。ところが、病院に行けば同じ年頃のお友達候補に出会える。同じ病気ともなれば、話に花が咲く。病院側もその辺は心得ていて病院は高級サロンのようだ。

病院経営上「薬漬け医療」はなかなか是正できないできた。

そこで国は医師や薬剤師を対象に服用の適正指針案（骨子）をまとめた。

国レベルで高齢者の内服薬に関する指針を作成するのはこの度が初めてという。薬の多種類の服用は副作用などのリスクが高くなる。

日本では「患者がとりあえず薬をもらいたがる」といわれ、家に帰っては服用せずにゴミ箱へ行くケースも少なくない。医療費の削減も期待される。指針は今年の春に完成・公表。一般国民全般に向けにも考えるという。

厚労省によると、60歳を超えると高血

圧や骨粗鬆（こつそしょう）症など複数の疾患を抱えることから、服用する薬の種類が増加し、75歳以上でさらに多くなる傾向にある。

診療報酬明細書を調査すると70歳以上の患者は6種類以上服用している。

東京大などの患者調査では、薬を6種類以上服用している場合に副作用が出やすくなったりするケースが急増。転倒の発生頻度は2倍に増え、認知障害のリスクが増加する、という。

このため指針案では「医療の質を向上させ、患者の健康に資すること」という目的を記載。高齢者が薬を服用することで生じる物忘れや目まい、失神など「有害事象」を列挙した。

安全性確保の観点から、単に薬の数を減らすのではなく、適正な処方内容への

見直しが重要であることを明記。複数の医師にかかっている場合は「お薬手帳」を活用してかかりつけ薬剤師にチェックしてもらうなど「医師、薬剤師、看護師などが一元的に情報を集約し、連携すること」とした。

NPO法人「高齢社会をよくする女性の会」が昨年秋、約5千人の高齢者に調査したところ、処方された薬を飲み残す患者も多く、4.7%が飲み残しの経験があると答えた。

同法人代表で東京家政大の樋口恵子名誉教授（家族関係学）は「服薬を不安に思う高齢者は増えている。『人生100歳時代』になり、いずれ自分で薬が管理できなくなる。薬は“命のもと”であり、薬の適正なあり方を考え直さなければならぬ」と話した。



NPO法人  
「高齢社会をよくする女性の会」代表  
東京家政大 樋口恵子名誉教授